

# 原発と

## 福島

### 未来のために④

吉田亜美(16)の目の前に、太平洋沿岸の故郷ではめったに見られない雪景色が一面に広がっていた。2011年3月、8・5km南の東京電力福島第一原発で事故が起き、小学5年の亜美は、母(45)ら4人と福島



# 同郷の友と笑顔戻る

県浪江町の自宅から避難。車で200km以上走り、たどり着いたのは、雪が降り積もる新潟県柏崎市だった。亜美はそのまま転校し、翌年には市内の中学校に進学した。

「福島なんだね」。同級生にしてみれば、軽い気持ちで口にした言葉だったのだろう。ただ、亜美は、抑揚や言い回し、故郷の大切な言葉を、笑われたように感じた。以来、亜美は変わってしまった。

12年の夏頃から休みがちな柏崎の別の中学校に転校した。人と話してもうまく笑えない。マスクをつけるのが安心できた。自分の硬い表情を見せなくてすむ。買い置きをし、カバンには予備を入れておいた。帰宅しても外さなかった。

\*

## 震災5年

母の知人が見つけてくれた避難先のアパートは1LDK。5人が暮らすには手狭で、母は台所に布団を敷いて寝た。夜遅くまでうるさいなど書かれた差出人不明の手紙がポストの中に入っていたことがある。思い詰めたような表情をした母から、「テレビ消して」と言われたことも。



ふたば未来学園高校の教室で、笑顔を見せる亜美さん(1月25日、福島県広野町)＝源幸正倫撮影

物音を立てないよう、息をひそめて暮らした。それでも、浪江から乗ってきた「いわき」ナンバーの車には、不自然な傷がついた。浪江が恋しかった。自宅の窓からは、太平洋に注ぐ請戸川が見えた。川沿いを彩る満開の桜を、もう何年も見ていなかった。

福島県広野町にできる県立ふたば未来学園高校の存在を友達から聞いたのは、中学3年の夏だった。母と姉(24)が卒業した地元の浪江高校などを統合する形で新設されるという。14年に開かれた入学説明会に向くと、やはり避難中という小学校時代の同級生に会えた。「この学校なら」。亜美の胸が弾んだ。

\*

15年春、入学式。亜美はいつものようにマスクをつけて席についた。1期生1

52人のほとんどは初対面。緊張した。壇上から校長の丹野純一(49)が語りかけてきた。「君たちは、ここにある現実を少しずつ変えていける。一人ひとりが未来です」。照れくさいけれど、そう言って迎えてくれたことが素直にうれしかった。

亜美は、1年2組のクラスメイトとうち分けられた。それは、事故の大きさとも関係している。1期生の約7割は亜美と同じ双葉郡の出身で、多くの生徒が避難経験者なのだ。

「学校に行けないのはつらかった」「転校先に居場所がなかったね」「避難先は狭くて音を出さないように気を使ったよ」……。不登校になったと告白する同級生もいた。みな同じように苦しみ、悩み、耐えて、ここにたどり着い

ていた。

休み時間、気の合う友達と愚痴を言い合い、おしゃべりの話をする。亜美の胸の奥がじわっと温かくなる。4年近い避難生活で失われた大切な時間を、少しずつ取り戻している気がする。

昨秋の文化祭のスナップ写真がある。生徒や来校者でにぎわう体育館で教諭が撮影した。カメラを向けられた亜美は、すつとマスクを外し、2本指を開いた。いつからだろう。マスクがいらなくなったのは。

(敬称略)

# 原発と

# 福島

## 未来のために⑤

福島県大熊町には14歳以下の子が入れない区域がある。東京電力福島第一原発事故の後、全域が政府の避難指示を受けた町が決めたルールだ。同県会津若松市に避難する中学3年の遠藤瞭(15)は昨秋、誕生日を迎えるとすぐ故郷に向かった。「15歳になったら連れ



# 故郷と向き合う高校へ

で行ってほしい」。父茂信(46)と母真紀(45)に頼んでいた。「町の現実をこの目で見ておきたいんだ」

自宅は福島第一原発の南西約4キロ。4年半ぶりだった。庭は雑草で覆われ、壁にはひびが入っていた。町を歩いた。懐かしさより、風景と記憶の妙なぶれが気になる。通学路も、鬼ごっこをした近所の空き地も狭く感じる。生い茂った雑草のせいかな、自分が大きくなったからだろうか。時間の流れと、生まれ育った町が失われていくような不安を、瞭は感じた。

原発事故が起きた2011年3月、瞭は町立熊町小学校の4年生だった。真紀と姉と3人で、同県いわき市の祖父父母宅に避難した。緊急作業に追われた東電社員の茂信とは、2日以上、

## 震災5年

連絡が取れなかった。

3人は7月、約1000キロ離れた会津若松市に引越した。避難者用の借り上げアパートで暮らしながら、瞭は、同市で大熊町が再開させた小中学校に通った。廃炉作業にあたる茂信は、同県広野町の社員寮で暮らし、休日だけ会津若松に

る二重生活が続いた。瞭は大熊のことがずっと気がかりだった。14年夏には、除染で出る大量の汚染土などを保管する国の中間貯蔵施設が、大熊町と隣の双葉町に建設されることが決まった。敷地は約16000坪にも及び、自宅を失う人たちもいると聞いた。

「大熊のために僕ができることはなんだろう」。瞭は問い続けた。

茂信と真紀は昨年11月、会津若松市の飲食店に瞭を連れてきた。瞭が15歳になり、一緒に大熊町を見て回った1か月後の夜だ。そろそろ受験する高校を決めないといけない。中学の教諭からは、瞭の成績なら県内トップクラスの伝統校に進学できると言われていた。「決めたよ」。瞭の選択



合格内定通知を手にする瞭さんを囲む茂信さんと真紀さん(8日、福島県会津若松市で)＝稲村雄輝撮影

は、15年春開校の県立ふたば未来学園高校だった。瞭は、その高校の教育方針やカリキュラムを熱心に説明し始めた。故郷、復興、将来……、避難生活の間に考えてきたことも。「自分たち若い世代が古里の再生にかかわらないと、故郷は故郷でなくなる」「あの学校なら、自分に何ができるか見つけられる気がする」

茂信はビールを飲み、「決意表明」を聞き続けた。「福島島の復興には放射性物質をコントロールする技術が不可欠なんだ」。息子は、将来は原子炉工学を学ぶ、と話している。

正直なところ、茂信には抵抗があった。「東電社員の自分には原発と向き合う宿命がある。しかしそれを子供までが背負うのか」と。ただ、小さい頃からすっかりした子供だった。中

学生になると、行動に優先順位をつけるようになった。どんどん成長しているのだ。

今年5日夜、廃炉作業から寮に戻った茂信の携帯電話が鳴った。「父さん、受かったよ」。合格内定通知が届いたという。茂信は手短かに電話を切り、心の中で息子に語りかけた。「瞭、これからが本番だな」

(敬称略、おわり)

(この連載は、福島支局市原佳菜子、星野達哉、稲村雄輝、編集委員 清水美明が担当しました)